
ヒキ、ネトゲ、プロットのな何か。

L i t a l y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒキ、ネトゲ、プロットのな何か。

【Nコード】

N3491H

【作者名】

L i t t a l y

【あらすじ】

お話のプロット書いてるつもりが、気付いたら途中からシナリオになってた。きちんと作品っぽく整えて公開しようかとも考えたけど、こういう半端な形のものを晒してみるのも面白そうだと思ったからあえて手を加えないで載せてみる。

とあるネットゲームの世界のお話。

このお話の主人公は黒のギルドのギルドマスターなんかをやっちゃつてる引き籠もり男。

もちろん無職、童貞。

そのネトゲには悪い事も迷惑行為もPKも何でもありの黒のギルドと、

法や秩序を重んじる白のギルドがあつて、

その両者はゲームの舞台全土、お互いのギルド員の多くを巻き込むくらい盛大にいがみ合つて対立して否定しあつてゐる。

でもある時全く未知の勢力が突如として現れて、それはゲーム内の一切の法則を無視して暴れ狂い、

黒のギルドだろうが白のギルドだろうが無所属だろうがモンスターだろうが、一切お構い無しに何もかもを屠りにかかる。

その未曾有の災厄によって多大な被害を被りまくつてゐる白のギルド黒のギルド両者は、

自分達の利害の為に互いを利用し合う形で共闘する感じになつてその未知の勢力に挑んでかかる。

しかしそれまで散々いがみ合つてたちぐはぐな彼らが付け焼刃で共闘したところで未知の勢力に対して効果的な抵抗をする事なんて出来るはずもなく、

こっぴどくやられっぱなし。

白のギルドの面々は「黒のギルドがちゃんと予定通りの陣形で動かないせいだ」と声を荒げ、

黒のギルドの面々は「白のギルドの連中がマニュアル主義の頭の固い馬鹿ばかりなせいだ」と息をまく。
結局協定はすぐに破棄される。

それからしばらくして、白のギルドマスターの中の人々がネカマじゃなくてリアル女だと知った黒のギルドのマスターは、
下心的なアレ丸出しで再び和解協定を求める。

白のギルドのマスターである腐女子は胡散臭さを感じつつも、

「白のギルドはお前らの事だつて全然余裕で許しちゃうんだぜ」的
懐の深さをこの際見せ付けてやるという、
超上から目線な考えでその申し出を受け入れる。

ネット上だけのネチネチした関係が続けるうち、
なんとなくメールやメッセなんかでお互いの相談をしあったりする
仲になる。

基本黒のギルドマスターが甘ったれた愚痴やら世間への怒りをぶち
まけ、

白のギルドマスターが「自分は聖職者」的な見栄張ってそれを許容
して聞いてやるみたいな。
そんな茶番じみた関係がしばらく続く。

しかし黒のギルドのマスターはまんまと白のギルドのマスターの演
じる温和な人柄に騙され、癒され、救われていつて、
いつしか彼女に対して尊敬の念やら、あるいはもうちょっと違う生
々しい好意を抱いてしまう。

辛抱堪らなくなった黒のギルドのマスターは、白のギルドのマスタ
ーにちよつと本気気味の告白する。

黒ギルドマスターのほとばしる本気汁にたじろいだ白のギルドのマ

スターは

「ゲームの中じゃ可愛いキャラクターを使ってギルドマスターなんてやってるけれど、

わたしはリアルじゃ結構本格的にブスでキモい腐女子だから、きつとあなたもリアルの私を知ったら愛せなくなるよ。

リアルの私は誰から必要とされない無能なばかりの人間。だからこの世界でせめて誰かに必要とされたかった。強く、なりたかった。

架空の世界でなら、架空の姿を得た私なら愛される人間になる事も出来ると思った。

あなたが愛してくれる私は、私が作り上げた理想の人間像。そう、虚像だよ。

現実の私は心だつてこんなにも弱くて浅ましい。自分の本当の醜さを偽ってでも架空の世界で人々から尊敬されて必要とされたいと思うような、そんな矮小な人間なの」

と心中をわりかし正直に語り、黒のギルドのマスターの申し出をやりわり断る。

が。

黒のギルドのマスターはそこで気付いてしまう。彼女も自分と同じなのだ。

黒のギルドのマスターは、自分が外見や上手く立ち回れない性格のせいで人から嫌われ、避けられてしまう現実に常々苦しんで、上っ面で物事を判断する無理解な人たちへの怒りの発露として黒のギルドを設立したような人間だった。

人を外見で判断する事の愚かさを、うわべで判断される事の辛さを

誰よりも知ってたから、

だから彼はありのままの彼女の姿を受け入れる。

そんな彼の歪んだ、でもちよつとほんとは純情臭い部分に惹かれて彼女も彼を次第に受け入れていく。

黒のギルドのマスターと白のギルドのマスターはお互いの利害のためじゃなくて、

ただ純粹にお互いを認め合つて、手を取り合つて、ちよつと桃色な空気とかも醸し出しながらハタ迷惑な第三勢力の掃討に臨む。

しかし白と黒のギルド員たちの間にはもちろんチームワークも糞も無くて、相変わらず第三勢力の前に成す術もない。

マスターたちの唐突に突入したラブコメ友情熱血モードにぶつちやけ困惑しっぱなしのギルド員たちに黒のギルドのマスターが問う。

幼い頃から周囲の人間に怪物と忌み嫌われ続けた俺と、

キモい、いらぬ子となじられ続けてきた彼女とが寄り添いあう姿は、やはり醜いだろうか？と。

なんか急に始まったマジレスっぽいアレにざわつく白黒双方のギルドメン達。

黒のギルドマスターは言葉を続ける。

「俺が黒のギルドを作ったのは、人から否定される事が辛くて、受け入れてもらえない事が辛くて、

必要としてもらえない事が辛くて、苦しくて、

それがいつしか怒りになって、その怒りをせめてゲームの中で解き放ちたいと思つたからだ。

そして彼女が白のギルドを作ったのもまた、人から否定される事が辛くて、受け入れてもらえない事が辛くて、

必要としてもらえない事が辛くて、苦しくて、本当は肯定してほしくて、

受け入れて欲しくて、必要として欲しくて、そんな現実では叶わない理想を彼女は这个世界に描きたいと考えたからだ。

俺たちは、根本の部分では同じだったんだ。

なあ、俺たちの本当の敵つてのは、一体なんだろうなあ？」

白のギルドのギルド員と黒のギルドのギルド員たちはお互いを見合う。

今までずっとお互いを蔑みあってきた仲だ。

いきなり「俺たち、お前らは実は同じだったんだよ」なんて言われなくてもそう簡単に納得して仲良くななんて出来ない。

白のギルドのギルド員が今まで通りの嘲るような目で黒のギルドのギルド員を見下しながら言う。

「全身黒尽くめの如何にも禍々しい装備とか厨房丸出しですねwwww」

白のギルドのメンバー達は口でそんな事を言いつつも、黒のギルドのメンバー達に補助魔法をかけてやる。

黒のギルドのギルド員が白のギルドのギルド員に言う。

「余計な事しやがって。

どうせてめえらインテリぶった補助魔法ばかりで必殺スキルとか持つてねえんだから出しゃばって死ぬなよwwww

立ちはだかる敵は俺たちが全部ぶつつぶすから……俺らを死なすんじゃないぜ」

補助魔法のかかった武器を手に第三勢力の怪物達に立ち向かう黒い軍勢。

怪物達が白の軍勢にたどり着く前に、黒い軍勢がそれを殲滅する。黒い軍勢が傷つき倒れるより早く、後方から白い光が放たれ彼らを癒す。

相互理解、なんていうのとはちょっと違う。

隊長が「仲良くしなさい！」っていうから協力するだけ。

でも。

でもホントは心のどこかで気付いてる。

この人たち、ホントはそこまで悪い人たちじゃない。

こいつら、ホントはそこまで頭の固い馬鹿じゃない。

だってこいつら、この人たち、相応に痛みを知ってる。

次第に第三勢力の怪物達の勢いを圧倒する白と黒混合勢力。

白のギルドのマスターと黒のギルドのマスターはお互いに背中を預け合いながら怪物を掻き分けて、怪物のボスを目指す。

しかしボスにたどり着くその一歩手前で、無数の怪物に四方八方囲まれて、

二人は引き離され、散り散りに怪物達の軍勢に飲み込まれる。

過去がフラッシュバックする。

いつだって望むものにたどり着くその手前で立ちはだかる怪物達。幼い純粋な願いを打ち砕いて、飲み込んでしまう無数の怪物達。

途方も無い現実飲み込まれて、途方も無い力で歪められて、歪んで、逃げて、逃げこんだ世界で見つけたもう一人の自分。

その何より大切な手が、何より必要な手が自分の手から無理やり引き剥がされる。

絡みつく怪物達の触手。

切り伏せようとするが、手に握った漆黒の剣はいとも容易く碎けてしまう。

これが、現実。

現実はいつもこうだ。

だから俺は怒りに身を任せる事にしたんじゃないか。

俺はこの怪物達を知っている。

俺は、俺と俺の大事なものを引き裂こうとするこいつらの正体を知っている。

そして、こいつらには俺のちからなんかじゃ傷一つ付けられない事を知っている。

抗いようの無い現実。

だから、俺は現実を諦めてこの世界に逃げ込んだんだ。

黒のギルドのマスターが諦めかけたその時、

無数のダガーが彼を囲む怪物達をバッサバッサ薙ぎ払う。

彼を慕うギルド員たちだ。

「あんたは悪人だよ。確かに立派な悪党だ。

あんたは憤怒をそのまま体言したような人間だ。

でも俺はそんなアンタだから信じられたんだ。

そんなアンタだからついて行きたいって思ったんだ。

この人なら、俺がリアルの世界で感じてきた、やり場の無い怒りを理解してくれるって思った。

俺がいつも感じ続けてきた孤独をこの人も知ってるから、だからこんな風に怒って、当たり前散らしてるんだなって、そう感じただ。

アンタが現実って怪物に飲み込まれて何度怒りに身を落としても、俺はアンタを信じ続けてあんたの背中を追う。

そう決めたんだ。

きつと現実の世界で俺がアンタにしてやれる事はそう多くない。

だって俺もまた弱い人間だ。

だから現実を閉ざして、逃げて、今じゃこんなところにいる。

でもこの世界でなら、俺にも剣を振るう力がある。

それをあんたのために使うつて、あんたが始めて俺に声をかけてくれたあの日、

アンタがはじめて俺を見つけてくれたあの日、そう誓ったんだ。

俺を見つけてくれた人間は、

利口になれない俺をただ俺として、ありのままに認めてくれた人間はこの世でアンタが初めてだったんだよ」

現実はいつも理不尽な力を振るって俺たちの何もかもを打ちのめす。打ちのめされた俺たちは心を閉ざして、

そんな心を閉ざした俺たちが集って黒のギルドを作った。

俺は、一人じゃない。

同じ痛みを知って、俺に加勢してくれる仲間がいる。

守りたいものもある。

あの時とは違う。

そうだ、守らなきゃな。

信じてくれるこいつらを、愛する人を。

「ほんととは気付いてたんです。
あなた方が怒りの剣を振るう時、そこには踏みつけにされてきた切
実な願いがあつた事を」

白のギルドのヒーラーが呟く。
続いて漆黒の盗賊が。

「下らない。
ほんとと下らない。
どいつもこいつも、何もかも。
あほくせえ、くだらねえ、しょうもねえ。
なんてな、そう思わないとやってらんねえってな。
裏切られるたびに、蔑まれるたびに、否定されるたびにそんな風に
考えるようになってた。
手を取り合うなんて超ダセエ。
みんなで仲良く！だなんてまじキモイしやってらんねー。
虚勢とか虚飾とか取っ払った俺の本当の声を学校の皆に封殺された
その次の瞬間、俺の口について出たのはそんな言葉だった」

そして再び白の軍勢のパラディン。

「世界には悲しいことが溢れています。

理不尽な事、どうしようもないこと、自分の力だけではどうにも出来ないこと。

だから助けを呼ぶのだけれど、何度も呼んだけど、何度も手を伸ばしたけど、

その手が誰かに握ってもらえる事は無かった。

だから僕はこの架空の世界で、手を差し出す事をやってみようと思っただけです。

待ち望みただけで結局訪れてはくれなかった英雄に、それなら僕がなろうと、そう思っただけです」

黒いバーサーカーが続ける。

「そう、伸ばした手を誰にも握ってもらえなかった。

本当の声を誰にも聴いてもらえなかった。

だから俺は憎んで、全部壊してやる事にしたんだ。

そんな時、同じように怒りを隠そうとしない不器用な同士達と巡り合った」

たとえそれが架空の都市のうらぶれた裏路地であっても。

「俺は」

たとえ触れる事の出来ないものであっても。

「わたしは」

確かめたかったんだと思う。

「ほんととはただ、つながりたかったただけなんだ」

この無力な手が誰かに必要とされる、そんな可能性の存在を。

人の意思は、微弱な電気信号として脳の内側、

細胞と細胞の隙間を飛び交っている。

強い、強い気持ちだが、微弱な電気信号に込められた強い思いがL A Nケーブルを介した電気信号の世界に介入し、
整然と打ち出された計算式に、ささやかなバグを引き起こす。

0と1の世界で碎けた剣は無数の0と1を絡め取り、再び形を成す。
黒のギルドを束ねる、醜悪な男の手の内側で。

碎けた欠片が正しく配列され、接合し、元の形を取り戻していく。
この架空の世界でいつしか最も人から慕われている、暴君の手の内
で。

でもその再構成された剣はもう漆黒じゃない。
きつと、心を現す色がもし存在するとしたら、それはこんな風な色
をしてるんだろう。

切り裂くのは「敵」じゃない。

いつしか自分で閉じてしまった扉だ。

穿ち抜くのは「敵」じゃない。

それでもまだ残された、この小さな鍵穴の先に見える光だ。

一閃。

怪物達を薙ぐ。

切断されて蠢く肉の塊。

その塊の内に、少女の姿を見つける。

肉の塊達は彼女の肉体を再び内に取り込もうと蠢き続ける。

蠢く肉の隙間にかすかに覗いた少女のその小さな手をこの無力な手で。

醜いだろうか。

俺が伸ばしたこの手は、醜いだろうか。

十数インチのモニター越しに、俺の手を待ち望み続けてくれる彼女のその姿は、醜いだろうか。

こんな俺の姿を、こんな彼女の姿を、人々はあの時そうしたように「怪物」と呼ぶだろうか。

掲げた剣の輝きが増す。

声が聞こえる。

仲間の声が。

俺と同じ、怪物達の声が。

ゆがめられて、ゆがんで、ゆがんだ姿を蔑まれて、だから苦しくて、
苦しいからもっとゆがんで、もっとゆがんだ怪物を、

人々はより深く蔑み、拒絶する。

怪物となった僕たちを、人は醜いと罵るだろうか。

俺は人を怪物にしてしまう「それ」に、つるぎを突き立てる。

俺を、彼女を、彼らを、奴らを、お前を、みんなを怪物にしてしま

った「それ」を力の限りに切り裂く。

頼むから、とどいてくれ――

……

その翌日、サーバの稼動継続を困難足らしめる致命的なバグの発生、その影響によるサービス停止がネットゲームの公式ホームページにて告知される。

本当にバグによるサーバの停止なのか、それとも大人の事情、つまるところ経済的な都合によるサービス停止なのか、その辺のところは分からない。とにかく、その架空の都市は、ある日唐突に消滅した。

そんな出来事から数ヶ月。

仲間達と旅をする舞台を失った黒のギルドマスターは今、現実の世界を旅している。

漆黒のユニコーンではなく、中古のワゴンRを駆りながら。公式ホームページの掲示板に残されたかつての仲間達の痕跡を頼りに。

「ねえ、あの看板のトコ、右じゃないかな」

助手席に、白のギルドマスターを乗せて。

「しかしあいつら、何でメールで自分の住所とかモロ晒して会いに来いとか言えちゃうかな。

どんだけ度胸あんだよ。

悪用されるとか考えねえのかな。

っていうかそんだけ度胸あるなら脱ヒキくらい余裕でできんだろって話ww」

黒のギルドマスターはまた文句を垂れる。

「君だつて私に会いに来てくれた」

「ばつ、違つ！それは度胸とかそういうあれじゃなくて！」

「じゃあ下心？」

「ち、ちちちちげーよ！違げーって！下心とか、ち、違うつて！俺はただ単純に……」

俺はただほんとに……」

「うん、分かつてる。分かつてるよ。だいじょうぶ」

白のギルドマスターがはにかむように笑う。

黒のギルドマスターはバックミラーを介してその笑みを覗き見ようとして、

ミラー越しに不意に目があってしまい、すぐ目を逸らす。
なんせ不器用な二人だ。

リアルにおける真っ当な恋人関係なんてまだまだ程遠い。

「彼らも、きつとそういう事なんだと思うよ。

あの時、確かにみんな感じたんだと思う」

こいつは臭い事を平気で言ってるのける。

さすが正義とか掲げちゃう白のギルドの長をやっただけの事はある。

こいつのこういう発言はホント、ダサイと思う。

でも。

「つながりを信じたい……か」

ダサイ事、恥ずかしげも無く真顔で言えちゃうこいつは、やっぱり
すげえと思う。

だから俺はこいつの事――。

ぶっちゃけ大して可愛くないし、空気読まないでダサイ事とか寒い事平気で言うし、案外結構ドジだし。

でも。

.....

架空の樂園を失っても、そこで築いた全てが0になるわけじゃない。

だって、俺たちはこうして生きてる。

この肉体に血は流れてて、手も足もまだ動く。

この足を心の傾く方角へ進めていけば、いつか。

カーブに差し掛かる時、急に横からトラックがしゃしゃり出てくる。俺はブレーキを踏むと同時に、横に座る彼女が体勢を崩さないように左手で制する。

この手を大切な人に向けて伸ばせば、ほら。

かすかに触れる。

体温。

出来ない生き物。

脈。

そこに、存在しているということ。

それを、信じたいとおもったこと。

俺もまた、同じ出来ない生き物として。

あの日、あの時、あの瞬間、確かに感じたつながりを信じたいと、そう思った。

残された可能性がどれほどにちっぽけでも、見落としてしまいそうなほどにちっぽけで脆弱であっても、それを自ら閉じさえしなければ。

本当の声を聴いた時、その声に自分もまた本当の声で答えたなら。

そう。

窮屈な軽ワゴンの中で身を寄せる引き篋もりゲーマー二人の姿は、道行く人々の目にやはり醜く映るだろうか。

世間の景色に馴染まない醜悪な二人組みに見えるだろうか。

あるいは、これから練炭自殺でもしに行くように見えるだろうか。
見えるかもなw

人はやっぱり、俺たちを「無様な生き物」と呼ぶだろうか。

ま、どうでもいいや。

だって俺が、俺たちがいつだって望んでたのは、ほんと、ほんとのほんとに望んでたのは、

いつだって、ただひとつだけの……—

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3491h/>

ヒキ、ネットゲ、プロット的な何か。

2010年12月31日02時23分発行